

---

# 聖絶（ジェノサイドからの帰還）

藪 冬彦

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

聖絶（ジエノサイドからの帰還）

### 【Nコード】

N9358X

### 【作者名】

藪 冬彦

### 【あらすじ】

北海道のサバゲー愛好者が、定例戦に集まった美瑛の丘で遭遇した大地震。そして時空を超えてアフリカ中部のルワンダ共和国の地に立った18人。周辺は死体が散乱する大量虐殺の渦の中だった。やがて彼らは本物の銃を手に取り、生死を賭けて引き金を絞った。。。

## 夜 戦（前書き）

平和ボケした日本人に覚醒を促したい気持ちで創作しました。

## 夜戦

閃光が交錯していた。

M4アサルトライフルのフルオートトレーサーから放たれる蓄光B弾だった。

その光の饗宴に赤城誠は、しばしば我を忘れ見入っていた。

初秋の週末、サバイバルチームの定例戦でホームフィールドの美瑛の丘に彼は立っていた。

気温は10度を下回らず珍しく良好なコンディションの夜だった。

ゴーグルが荒い息で曇り始め視界が狭くなる。

数ゲームを消化し、深夜2時を過ぎようとしていた。

集まった仲間は18人。

もう10年以上を費やす大人達の遊びだった。

9人对9人フラッグ戦を決行する、敵味方ともフォーメーションは息がぴったりだった。

無線を介しながらお互いの位置を確認し、敵の殲滅を謀る。

ブッシュに身を隠し、しばしば訪れる静けさの中に電動ガンのリコイル音が静寂を破る。

突然、BB弾が耳元を掠めていった。

（おっと 危ねえ！）と赤城は唇を尖らせた。

「赤城さんの前方10メートルの木の下に2人居る・・・引き付けるから後ろに回りこんでくれ」

赤城のインカムに味方の誉田から無線が入った。

「OK！」

誉田のAK47がけたたましく唸り始めた。

敵も応戦する。

その間隙を衝いて赤城は匍匐前進を始めた。

何か違和感をおぼえた。

突然眩暈を感じたのだ。

地鳴りのような音が地中から押し寄せてきた。  
そして地面が揺らぎ始めた。

(地震か!?)

方々から仲間の動揺の声が上がり始める。

「やばいぞ！地震だ」

「全員セーフティゾーンに戻れ！」と赤城が叫んだ。

揺れは激しさを増し出した。

横揺れから縦揺れになり立っていることも難しくなった。

「まずい 皆んなその場から動くな 危険だぞ！」

「収まるまで待つんだ」

赤城は這い蹲るようにその場に伏せていた。

5分ぐらい経っただろうか、とても長く感じた。

ようやく揺れも収まり出した。

立ち上がった赤城は、チーム全員全員の安否を確認するために声を上げた。

「すぐにセーフティまで集まってくれ」

ブッシュの中から次々と仲間が現れはじめた。

LEDライトのランタンの下に全員が集まった。

赤城は彼らを見回して安堵の溜息をついた。

「みんな怪我はないようだな よかった」

「そう云えば、今日は9月11日だよな」と誉田が呟いた。

あの東北大地震から6ヶ月が経っていた。

「今日はもうお開きにしよう お疲れさん！」

「おい 携帯が繋がらないぞ！」と誰かが叫んだ。

赤城は自分の携帯を開いた。

その時、足元の地面が崩れ始め地面が裂け始めた。

絶叫とともに全員が滑り落ち、地中深く飲み込まれていった。

つづく



## 夜 戦（後書き）

戦国自衛隊に少なからず影響を受けました。そしてちょっとグロ―バル化しました。

## 死 臭

鼻腔を突く異臭で彼らは目を覚ました。

そこは小高い丘の上だった。

いや丘ではなく、クレーターののような窪地の縁に男達は居たのだった。

一瞬、ごみ処理場に迷い込んだ錯覚に陥る。

しかし下から漂よい上がる異様な匂いの元を辿って見ると生ごみではなく、そこには褐色の人の死体が堆く積み上げていたのだった。

「おいなんだ　ありゃ？」

「死体だ」と冷静に赤城は答えた。

動揺する声とともに次々と男達は胃の中身を戻し始めた。

そして我に還った男達は、迷彩のバンダナを首から慌てて外し、口と鼻を覆った。

禿げ鷹が死体をついばみ始めると、唸りを上げて蠅が上空に舞い始める。

まさしく地獄の景観だった。

雲ひとつ無い空に、大きな太陽が地上のあらゆる水分を蒸発させよ

うと唸っていた。

「ここに居たらまずいぞ」

医師でもある赤城は、後ろに立ち尽くす仲間を見て叫んだ。

「出来るだけ早くここから退避するんだ」伝染病に感染する恐れと身の危険を感じた男は17人に声を掛けた。

彼らは、訳も分からないまま草原の丘陵地帯を徘徊し始めた。

「怪我をしている者は居ないか？」

全員の顔を見渡すが、大丈夫と云う頷きが返ってきた。

だが全員真っ青な顔で、不安で押し潰されそうになっているのが分かった。

「ここはどこなんですか？」誉田の震える声がした。

「分からん」赤城はそう答えるしかなかった。

つづく



## 異国の地

「ルワンダですよ 多分・・・」と後方から声が上がった。

驚いた男達は一斉に声の主を見た。

「今言ったの柳田さんですか？ 何故分かるんです？」と誉田が続けるように訊く。

「僕は学生の頃、海外青年協力隊の活動で中央アフリカへ1年間滞在しました」

「ルワンダは中部アフリカの内陸国で、コンゴ民主共和国の東側に位置し、その国土は草原となだらかな丘陵で構成されることから”千の丘の国”と呼ばれているところです」

「この景色や死体の状況からすると間違いなくここはルワンダ共和国だと思います」

（柳田さんは、旭川の工業高校の土木科の教師なんです）と誉田が赤城に囁いた。

「すると我々は遙か北海道から地球の反対側のアフリカにワープして来たという事なのか？柳田さん」と赤城が問い掛けた。

「ええ 10年も前の事ですが私の記憶が正しければ間違いないと呟いた。」

それを聞いていた男達は信じられないのか、笑いだす者も現れた。

その時、一人の男が肩掛けしていたM4ライフルを不思議そうに見詰めている。

「どうした 阿部さん」と隣の男が声を掛けた。

「さっきからおかしいと思っていたんだが、なんか装備が重く感じないか？」

「それにこの電動ガン重すぎだよ 変だ」と言いながらセレクトレバーをセーフティからFULLに切り替えて、ダットサイトを覗き遠くに見える灌木を狙った。

引き金を絞る。

乾いた激発音が周囲の静けさを破った。

阿部と言う男が驚いた拍子に銃を投げ出し、右肩を摩りながらその場に尻もちをついていた。

何が起きたのか理解し難い状況に、全員の思考が固まった瞬間だった。

つづく

## 実弾

我に返った赤城は、直ぐに自分のアサルトライフルを肩がけのスリングから外した。

マガジンを確かめると、そこには真鍮の弾頭が鈍い光を放つのが見えた。

さらに右足のレッグホルスターから1911ガバメントを抜き出し、カートリッジをリリースした。

やはり、45ACP弾が収まっている。

その様子を見ていたチーム員全員が次々と自分の銃器を点検し始める。

赤城は驚嘆の声を上げるチーム員達を見回し、一人の男に声を掛けた。

「副島さん ちょっと来てくれませんか？」

現れたのは、旭川の現役陸上自衛隊員である副島省吾だった。

「トイガンが実銃になるとは、これは一体どうしたことでしょう？」

「さあ 私にも全く理解できませんが、間違いなく本物です」副島が人差し指と親指で5.56mmのNATO弾を抓んで見詰めている。

「我々も異国の地に瞬間移動したのだから、何が起きてても不思議じゃないですけど……」副島が呟く。

頷いた赤城は、ガバメントを50メートル先の大きな木に狙いを定め引き金を絞った。

乾いた激発音と共にスライドが後退しカートリッジが輩出され弧を描きながら副島の足元に落ちた。

白煙を放つ銃口の50メートル先で大木の枝に当たり舞い落ちた。

それが文字通り引き金となり、全員が四方八方に銃を撃ち始める。

その時、赤城が大声を上げた。

「おーい 射撃を止めるんだ！」

気付いたチーム員が赤城と副島に注目した。

「こちらは副島さんです。現役の自衛隊員です。撃つ前に実銃の取り扱いや注意点についての話を聞こう」

一歩前に出た副島は、簡潔に銃の扱いについてライフルとハンドガンとに分けてレクチャーする。

銃の知識は各自それなりに持ち合わせているため、スムーズに講義は進んでいった。

副島は一緒に参加していた同僚の自衛隊員と手分けして、横一列に並ばせから射撃の練習を始めた。

驚嘆と感動を覚えつつ、おもちゃの銃を操っていたサバゲーチームが即興の傭兵部隊へと様変わりしたのである。

しばらく物凄い轟音が辺りを覆っていた。

誉田が手の痺れと耳鳴りに負けてひと息入れるため、ウエストポーチのミネラルウォーターに手を伸ばした。

ふた口ほど飲みながら、何気なく陽炎が立つ遠い丘陵に目をやった。

「何かがやって来るぞ！」と誉田が叫んだ。

赤城も目を細めて言われた方向を確認し、デジタル双眼鏡を取り出した。

小高い丘陵の林道を砂埃を上げながら2台の車両が向かって来る。

時々フロントガラスに太陽光線が当たり、木々の間から信号灯のようにな規則に反射している。

ジープを先頭にベンツのトラックが後続していた。

幌をオープンにしているジープには、4人の兵士が乗っており、トラックの荷台には死体が無造作に積み重ねられているようだった。

(兵士)と云う赤城の言葉を聞いた副島が、即座に指示を出した。

「全員 伏せるんだ なるべく身を低くしろ！」

ライフルを構えた18人の男達は草原の真ん中で身を伏せながら、  
とてつもない緊張感に包まれた。

つづく

## 近接戦闘

砂塵を巻き上げながら2台の車両が、トカゲの集団のような男達の10メートル先を通り過ぎて行こうしていた。

18の銃口が走行する車両を追うように一斉に動いていた。

ジリジリと刺すような太陽光線を浴びながら、男達の額から汗が滴り落ちる。

時速80キロは出ているだろうジープが突如急停車した。

トラックが追い越し、軋み音たてながら慌てて停まった。

「どうした？」赤城が呟いた。

「まさか見つかったんじゃないでしょうね」誉田が蒼い顔で周りのチームメイトを見回した。

ジープから褐色の肌をしたカーキ色の軍服とベレー帽を被った中年の兵士が一人降りてきた。

そして傍の灌木に向かって小便をし始めた。

鼻歌が聞こえる。

まるで地面に小便で字でも書いているかのように腰をくねらせていた。

ようやく終わったのか二三度腰を振り、ズボンのジッパーを上げる  
仕草をしている。

「長い小便だな」

「前立腺でも悪いんじゃないかねえの！」と誉田呟く。

一瞬、笑いが漏れた。

その瞬間、兵士が振り向いた。

しばらくこちらの方を訝しげに眺めている。

何かを感じたらしく靴先で地面をなぞり出し始めた。

そして地面に落ちている無数の金属片に気が付き、屈んで指先で取  
り上げる。

弾頭の一部を発見したらしい。

兵士は慌ててジープに引き返し、大声で仲間になにかを訴えた。

AK47を受け取ると兵士は、3人の仲間を従えて慎重にこちら側  
に接近してくる。

そして彼らは散開し、策敵を始める。

「まずい事になったぞ 副島さん」赤城はM4アサルトライフルの  
セーフティレバーをFULLに切り替えた。

副島は、シグザウアーP226ハンドガンのスライドを引き、チェンバーに銃弾を送り込んだ。

副島は赤城の耳元により囁いた。

「近接戦になります　ここは我々に任せてください」引き締まった副島の顔が頷く。

「わかった　頼みます」赤城はチーム員に向かい指3本を立ててから、兵士達の方を指差した。

そして副島が2人の自衛隊員を集めた。

副島、近野、西城のお揃いの迷彩BDUを着た3人は、接近戦に対する作戦について打ち合わせた。

西条は援護射撃のためにその場に残し、副島と近野はハンドガンだけで敵に向かって行った。

突然、両手を後頭部に回して目の前に現れた2人の自衛隊員に、民兵の4人は銃口を向けた。

「ハロー　ウイ　アー　ジャパニーズ　ソルジャー！」副島はにっこり微笑んだ。

4人の民兵は、何かを言い合い、銃口を徐々に下ろし始めた。

その時だった、2人の自衛隊員は後ろに回していた銃を握っている手を空かさず前に押し出し4人の兵士の胸を狙って連射し撃ち抜いた。

後方のトラックから仲間の兵士がライフルを構えて応戦しようとしてトラックの窓から銃口を突き出した。

しかし1発も発射出来ず眉間を撃ち抜かれた。

その狙撃手は西条だった。

一連の銃撃戦は、あっという間の出来事で地面に伏せていた仲間は、啞然と事の成り行きを見守っているだけだった。

「すげえ！」誉田が感嘆の声を発した。

つづく



## 遺棄

10人程で地面に大きな穴を掘り、5体の民兵の死体を埋めた。

灌木の枝を集め上から被せる。

傍で一人の男が作業の間中、低い声で読経をしていた。

富良野にある真言宗の寺の住職だった。

「有難う御座います 五所川原さん」と副島が頭を下げた。

禿げワシが遠巻きに彼らの行動を監視している。

赤城と誉田を先頭に残る8人が、トラックの様子を見に行った。

トラックの上空を、死体を啄ばむために隙を狙う無数の鳥達が旋回していた。

「さっきの死体捨て場に移送する途中だったのだろう」と赤城は言いながらトラックの荷台を覗き込んだ。

腐臭が漂い、蠅が唸りを上げている。

タオルで鼻と口を覆い隠し、ゴーグルをしていても鼻をつく臭いは想像を絶していた。

「この高温多湿の気候では、腐敗の進行が驚くほど早いんでしょうね」誉田が云う。

荷台に上がった医師の二人は、死体の確認をしながら一体つつ下に  
いる仲間に手渡した。

頭をナタのようなもので割られている男、片腕が無くなって  
いる者、銃で撃たれている子供や乱暴を受けて殺された若い女の死体も  
かなりあった。

外科医である赤城は、見慣れている人の亡骸ではあるが、損壊の  
状態が悪すぎた。

老若男女十数人の遺体が地面に横たわっていく。

五所川原がやってきて、また般若信教を唱え始めた。

「おい そつちが終わったら、こっちの方も頼む！」と副島が  
10人の男達を呼んだ。

午後遅くなり、太陽も少しづつ西に傾きつつあった。

「とにかく陽が暮れる前に、この車両を使ってここから移動しな  
ければならない 急ごう」と副島が云った。

幸いトラックの荷台は死体の出血や体液でそれほど汚れてはいな  
かった。

（きっと死体を回収する前に、おおかたの血が地面に流れ出たのだ  
ろう）と副島は思った。

その時、赤城の驚く声が頭上から聞こえた。

「生存者がいるぞ！」

全員が荷台を見上げた。

つづく

## 生存者

そこには赤城の両腕に抱きかかえ上げられた男の子がぐったりとしていた。

誉田が慌てて荷台から飛び降り、赤城から子供を受け取る。

「すぐに水を与えてやってくれ 脱水症状だ」と赤城は興奮している様子だった。

「意識レベルは低いが、外傷はないようだ。軽い脳震盪だと思う」と誉田に伝えた。

青井という男がペットボトルの水を持ってくると、「私は介護士です、任せてください」と云いながら子供の傍に寄った。

水をタオルに含ませてから子供の口に軽く押し当てている。

まるで吸い寄せられるように唇が水を求めて開き、腫上がった舌が動いた。

そして少年は目を覚ました。

少年はペットボトルを鷲掴みにして、水を飲み始めた。

男達が集まって来て子供を取り巻く大きな輪になった。

突然、少年の目が恐怖に襲われたように大きく見開き、ボトルを放り投げて後ずさり始める。

“ We are on your side . ” と柳田が声を掛けたが、彼はトラックの下に潜り込んでしまった。

「柳田さん一緒に来てくれ、あの子との通訳をして欲しい」赤城が声のトーンを落として言う。

「他の者は今やっている作業を続けて欲しい、この子を刺激しないように配慮してくれ」

そして膝まづき屈みながら、恐怖に怯える子供を赤城が手招きする。

チョコ味のカロリーメイトを持った柳田が笑顔で隣に並んだ。

つづく

## 民族紛争

柳田が英語で話しかけながら、自分で食べる仕草を見せてからカロリーメイトを差し出した。

少年の目がチョコバーと二人の異邦人の顔を見比べて警戒を解こうとしない。

柳田がひと口そのチョコバーを頬張り美味しそうな表情をする。

少年の目がカロリーメイトに釘付けになり喉を鳴らした。

赤城が柳田からバーを受け取り、食べようと口を開ける。

少年の我慢が限界になり、ふたりの方へ擦り寄る。

その時、赤城がカロリーメイトを少年の届く位置までバーを持つ手を差し伸ばした。

素早い動作で少年は、それを奪い取ると口の中に無理やり押し込んだ。

荒い息をつきながら瞬く間に胃袋へ飲み下したようだ。

もう一つのチョコバーの包み紙を破り、柳田が手渡す。

今度はゆっくりと味わうように食べ始めた。

急にむせ始めたので赤城がペットボトルの水を与える。

飲み終えると少年はようやく落ち着いたようだった。

痩せぎすで汚れてはいるが、利発そうな目の大きな少年だった。

柳田がゆっくりと英語と片言のルワンダ語を交え話しかけている。

無口だった少年は、少しづつ心を開き始めた。

柳田が赤城に説明する。

「彼はツチ族の少年でキブエという町に住んでいた。昨日、町の住民が教会施設に集められ、フツ族の兵士に襲われたそうです。両親も兄弟も全員彼の目の前で殺されたと言っています。」

「まるで虐殺じゃないか」と赤城が暗い顔をする。

「私が10年前にタンザニアに居たときに聞いた話ですが、1993年、当時のルワンダの大統領は、亡命ツチ族からなるルワンダ愛国戦線の軍事的な圧力と民主化を求める国際的な世論に抵抗できなくなり、一党支配に終止符を打つ和平協定に調印したそうです。しかしこれまで一党支配で利権を独占してきたフツ族支配層が簡単にそれを放棄することはできない。そんな状況のなかで大統領が何者かに暗殺されたのをきっかけに、ツチ族の大量虐殺が始まったそうです。」

「単なる民族紛争というわけでもなさそうだな 裏がありそうだと赤城が呟いた。」

少年は二人の会話を不思議そうに聞いている。

彼は素直に二人に従い、トラックの下から這い出てきた。

疲れが体全体から滲みでている。

「少し休ませてやろう」という赤城の指示で柳田がジープまで連れていきシートに横たえさせた。

柳田が傍を離れようとする、少年は慌てて彼の手を握り離さなかった。

優しく頷きながら少年の肩を固く抱きしめた柳田の頬に涙が止め処なく流れ出した。

つづく



## 諍い

トラックの荷台を、綺麗に掃除した男達は次々に乗り込み、電気工事士の佐藤と岡田が運転席に就いた。

「なんか薄気味わるいな」と荷台の手擦りを掴みながら山田が呟いた。

隣に並んで座った同僚の寺林も頷く、二人は保険会社に勤務するサラリーマンだ。

「そりゃそうだとも 何十人も虐殺された死体がここに積み上げられたんだから」と公務員の三重が二人に言う。

「これが本当の戦争なんだ」皆が行きつけのトイショップの店長鎌田が蒼い顔して皆を見る。

「更科、所よ 明日は店を開店出来ないぞ こりゃ」と鎌田が溜息をついた。

「そうすよね ここはアフリカなんですもんね」あらためて周りの景色を確認する店員達。

「しかし SF映画みたいな事が現実起きるなんて信じられるか？」杉山がグロツクを手に持ち眺めて呟いた。

「おい 危ないからここでガンを出すのは止めるんだ！」近野と曹が云った。

「近野さん 何故あんたは自衛隊員なのに戦争ごっこみたいな遊びをしてるんだい」杉山がむっとして訊いた。

「軍隊という所は、秩序と信頼関係で成り立っている。演習するときもかなりの制約があるわけで、撃った空薬莖も全て回収しなければならぬ」

「ようするに人に向かって撃てないし、自由に銃をぶっ放せないということなんだ」

近野をからかうように杉山が続けた。

「そくだよな銃も弾薬も全て俺達サラリーマンの税金なんだから有効に使ってもらわなくっちゃね」ニヤリとして杉山が近野を見て言った。

「そういう言い方はよくないぞ 杉山君！」と市役所勤めの三重が諭した。

「東日本大震災の時、どんなに自衛隊の活動に勇気づけられたか皆も分かってるでしょ？」三重が高潮した顔で声のトーンも上がる。

「分かった 分かった おっさんの言うとおりだ 悪かった」とグロックを腰のホルスターに仕舞いながら杉山はふて腐れるように云う。

「イライラするのは分かるが、こんな状況なんだから皆で助け合っ  
て行かなくてはいけない」と五所川原がその場を収めるように屹然と話す。

その時、全員のインカムに赤城の声が響いた。

「キガリに向かう 後をついてきてくれ」

岡田が「了解です」と返信し、「出発するぞ！」と荷台の仲間에게、運転席の佐藤に向かって頷いた。

排気音けたたましくV8エンジンのトラックが動き出し始めた。

夕焼けがアフリカの空を真っ赤に染め、鬱蒼としたブッシュと丘陵地帯に漆黒の闇が訪れようとしていた。

つづく

## 公立技術学校

公立技術学校は、ルワンダ共和国の首都キガリに存在したサレジオ会系のセカンダリースクールであった。

ルワンダ虐殺さなか2000人を超えるツチとフツ穏健派の避難民がフツ過激派の襲撃から逃れるためにこの学校内へ避難しており、国連平和維持軍のベルギー兵が学校の警護を行っていた。

2台の車両は、彼らに助け出されたルワンダのツチ族の少年ティンディに導かれて首都キガリに到着した。

キガリは、ルワンダのほぼ中央に所在し標高1433mから1645mと高地に位置し、人口は約30万人。

ドイツ植民地時代の1907年に開かれ、以後ベルギー領時代を通してルワンダの中心都市であった。

1962年にルワンダが独立した際に、首都に指定される。

キガリ市は、ルワンダ全体がそうであるように、いくつかの丘から構成されていて、中心はキヨブ地区、カキイル地区の丘の上部地域となる。

旧都心のキヨブ地区には大統領官邸や多くの商店が集まり、新都心であるカキイル地区には国会議事堂、いくつかの中央省庁や大使館が位置し、その他の地区や丘の下部は概ね住宅街となっている。

ティンディは、キガリ郊外にある親戚の家に彼らを連れていった。

恐る恐る現れた彼の叔父は、軍服姿の男達を目にして膝から崩れて必死に哀願するように手を握り合わせた。

きつとフツ族の民兵がツチ族狩り始め、殺されると思ったのだろう。

すぐに集団の中からティンデイが駆け寄り、叔父の肩を掴んだ。

顔を上げた叔父は、幽霊でも見たように驚きそしてティンデイを抱きしめた。

ティンデイから全てを聞いた叔父は、周りをはばかり泣き声を上げて再会を喜ぶ叔父と甥の姿に、18人の男達は胸を詰まらせた。

ティンデイの叔父は、キガリにある公立技術学校の校長であった。

18人は、家の中に招かれて叔母と3人の娘が大急ぎで客席の準備をした。

ささやかな食事だが、一日まともな食物を取っていない彼らにはごく馳走だった。

皆、無言でパンを食べジャガイモのスープを飲み干した。

赤城が柳田を介し食事の礼を述べて、明日朝早く出て行く事を告げる。

「何故日本人がここに来たのか、軍服を着ているのは国連平和維持軍に参加したのか？」

ティンディの叔父の質問攻めに遭う。

しかし赤城も明確に答えることが出来ず歯がゆさに困った。

「数ヶ月前からフツ族過激派の襲撃が相次ぎ、虐殺から逃れるために私の学校にフツ族の児童を多く含む難民2000人が避難しており、国連平和維持軍のベルギー兵が学校の警護を行っている。」と校長の叔父が云う。

「明日はフツ族過激派民兵のインテラハムウエが大挙して学校を取り囲むという情報が入ったようなんです」と柳田が赤城に伝えた。

「インテラハムウエって？」

「ルワンダ政府軍と結託した過激派民兵組織の通称のようです」

「でも国連傘下のベルギーの平和維持軍が守っているなら安心ですよ」

「でも赤城さん ソマリアで起きた米軍の作戦の失敗例もありますよ」柳田が副島を見ていった。

「ブラックホークダウンだな」と副島が頷く。

「分かりました、明日は学校までティンディとあなた方家族を無事送り届けます 約束します」立ち上がった赤城はティンディの叔父と固い握手を交わした。

「聞いていたか？ みんな、明日もハードな1日になる。今晚はゆっくり休んでくれ」と全員を見回して言った。

「柳田さん 今日はいったい西暦何年の何時なんですか？訊いてください」杉山が口を挟んだ。

「1994年 4月10日だそうです」言い難そうに柳田が云う。

「17年前だと！」杉山が叫ぶ。

数字を聞いた男達は動揺を隠せなかった。

「とにかく1日1日を生きて行こう、きっと元の日本へ帰れる時が来ることを信じ生き抜こう」と副島が云った。

男達からは返事が起きなかった。

明日という日が、地獄の1日になる事を予知したかのように。

つづく



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9358x/>

---

聖絶（ジェノサイドからの帰還）

2011年12月8日01時56分発行